

[11]

氏名(本籍地)	金井 年(大阪府)
学位の種類	博士(学術)
学位記番号	博乙第51号
学位授与年月日	平成18年9月30日
学位授与の要件	学位規則第5条第2項該当

論文題目 **寺内町の歴史地理学的研究**

論文審査委員	(主査)	昭和女子大学教授	田畑 久夫
	(副査)	昭和女子大学教授	芦川 智
		昭和女子大学教授	平井 聖
		昭和女子大学教授	山本 暉久
		近畿大学 教授	櫻井 敏雄

論文要旨

寺内町研究には、文献史学・考古学・建築史学などのアプローチがあるが、本研究は、現存遺構の分析、空中写真や地籍図の読解といった、歴史地理学的手法を用いて中・近世における寺内町の実態解明を行ったものである。

本研究の目的は、三河・北陸などの文献史料が乏しく、かつ地上から消えた寺内町の復原を上記のような手法を用いて行い、また畿内においても看過されていた寺内町や、先行研究があっても全面的再検討を要する寺内町を取り上げて検討し、最終的には「比較寺内町論」を構築することにある。

第一章「総論」では、先行研究が豊富な大山崎の事例を用いて、寺内町の歴史的背景から、16世紀の都市化のうねりの中で、寺内町が形成されていく過程について概観し、寺内町を、「環濠」「土塁」によって囲われた「構」を形成し、原則として真宗寺院を中心とした門徒集団で構成された、「所質」にあらわれるような「惣」の性格を持つ「町」とよびうる計画された都市的な場と定義している。

第二章「寺内町研究史」においては、戦前（長沼賢海・牧野信之助両氏の包括的研究がその後の諸研究のベースになっている）から現代に至る先行研究を網羅的に紹介し、本研究の立脚点を次のように確認した。①一向一揆との係わり、②寺内町＝理想都市論の否定、③城下町とのプラン上の類似点の強調および寺内町の先進性である。

第三章「大坂石山本願寺寺内町の空間構造－最近の学説を中心に」では、近年注目を浴びている大坂石山本願寺寺内町の復原案についての伊藤毅、仁木宏、天野太郎、藤田実諸氏の4説を紹介し、それらの説の妥当性を検討した。『天文日記』『私心記』を史料として、どのように図化するかがポイントとなる。さらにこれらの4説は概念図と地形図上に図示したものが混在しているため、同一レベルでの議論

が難しい面もあるが、①吉崎と金沢がその後に建設されるモデルになったと考えられること。②寺内町内部の町名は寺院からの相対的方向を示しているの2点から、仁木宏の説に妥当性を多く見出した。

第四章「寺内町の形態の類型とその変容」では、寺内町を「都市プラン」という観点から包括的に捉え、その類型化を試みた。単に成立時期でくくるのではなくて、地形的立地条件や条里地割との関連でその性格の変遷（町のサイズの縮小化、防御性の希薄化）をたどった。近世における寺内町の変容過程についても論じた。今井や御所では町域が拡大している、ということである。また、近世城下町については町割、屋敷割レベルで町のプランを中心に論じている。その結果から、家屋型式から空間を高密度利用した「都市的」寺内町、そのような現象がみられない「農村的」寺内町という二つの概念を提示している。その上で分化が生じた理由について説明した。中世成立の「農村的」寺内町が農業的要素を払拭した結果、「都市的」寺内町に変貌した、ということである。

第五章「寺内町の形成と原集落」では、寺内町の母体となった原集落について、中世の集村化現象と絡めて、これまで考えられていた、寺院の建立が先行しそれが寺内町化する、という図式に対して、原集落が存在し、そこに真宗寺院が入っていった寺内町の成立をみる、という試案を提示している。寺内町の建設が本願寺主導か在地主導か、の論争に対する提案である。山科や大坂石山といった本願寺の拠点となった寺内町と、多くの在地寺内町とは区別されるべきであり、ここでは後者の形成について構想した。

第六章「吉崎における中世的景観と近世的景観—絵図を通してみた」では、主に近世の絵図類に依拠しながら吉崎寺内のプランについて論じた。その結果、中世における計画性は確認しがたいものの、都市的な様相は推測しうること、近世における門前町の形成は、寺内町とは全く別個のものであることを確認した。

第七章「久宝寺寺内町の考察」は、本論文で最も重要な抛り所としている久宝寺寺内町の包括的研究である。新出の絵図、史料を用いて、前半部では寺内町の支配権の問題、都市プラン、構成員について、後半部では4枚の絵図をもとに、近世初頭～明治期に及ぶ景観変遷を明らかにするとともに、その理由について考察した。具体的には、先行研究の中で、町の実質的支配権は安井一族かそれとも集団運営か、町の北西部に張り出す形の久宝寺城と町との関係はどのようなものであったか等といった点が争点となっている。本論では町の形成過程について、旧大和川に沿ったラインが先行したのではないかということ、町の構成員が半径約5キロメートルの範囲に位置すること、安井一族の強大さ、といった3つの点から、城下町との類似性の再確認、周辺地域に対する中心地として機能していた、という結論を導いている。

第八章「寺内町プランの解明—枚方招提寺内を例として」では、町の形態が比較的よく残存する枚方招提寺内町を取り上げた。屋敷地の配置に際して、軍事上の「ポイントを押さえる」というのが寺内町建設の基本であり、近世の「由緒実録」に出てくる武士団の居住場所を図示し、寺内町の作られ方を論証した。模式図を作製するに当たって史料を一部改変した。理由は次のとおりである。「由緒実録」は寺内町建設のプロセスを述べている。しかし同時代史料ではないので、史料批判を必要とする。ところが記述内容を検討しうる他の文書は存在しない。そこで現地調査を行うと、図中に「溝掘」とした西側は崖を成し、家屋を建設することや「遠見」することも不可能と診断された。そこで、この箇所は書き手の書き損じと考え、「西」とあるのを「東」つまり寺内町内部の要衝に当たる地点に「宇山兄弟」の位置を比定したのである。

第九章「三河の寺内町プラン—その特徴と畿内型寺内町との比較」では、三河の事例を上げ、それらが「寺内町」であること、またプラン上、城下町のミニチュア版とってよいものであることを模式図を作製して明らかにした。具体的には、上宮寺内では、山科と類似の三重構造が確認できた。三河の寺内町については、文献史料の乏しさから殆ど研究が進んでいない。また、三河には寺内町はなかった、という見解に対して、これは徳川家康によって「町」の部分が破却されたことを見落としたことからきた誤解であることを「上宮寺の絵図」をはじめとする史料から立証した。

第十章「北陸の寺内町」では、北陸の寺内町として安養寺寺内（現小矢部市）を取り上げ、それが史料的にもプラン上からも城下町の様相が見られ、三河と同一の論理の上に成立した町であることを論じた。安養寺寺内は地上から消えた「廢寺内町」である。これに対して一般に寺内町と云われる井波、城端が「寺内町」ではないことを、天正13年に豊臣秀吉が「越中国北野寺内」に出した禁制、同年に前田利長が出した「定」という2つの史料を根拠として論証した。

第十一章「歴史的都市の近代的変容—久宝寺・八尾両寺内町の事例」では、寺内町久宝寺・八尾が成立後どのように変容していったかを次のように考察した。すなわち、近世では両寺内町とも農村的な色彩は強いという点が共通していたが、久宝寺の方が多くの木綿商人がみられることから経済力や人口規模において勝っていた。近代になると、八尾に役所が設置されたこと、近隣農村の合併による巨大化、交通機関の整備などにより農村的な色彩が減少し、久宝寺よりも都市化が進展した。一方久宝寺は近代以降も八尾のように急激な発展が見られなかった。その最大の理由は行政機関を有していなかったからである。

結章では、日本全国を俯瞰すると、①寺内町の真宗勢力が強大であり、②都市を建設しうる経済力を有する地域に限定されることを考慮して、これまで取り上げた寺内町について、次の類型が認められることを示した。

〈畿内型〉は、一向一揆に際して織田信長方についたほか、多くは近世に入ると在郷町として変貌をとげ、宿場町となるころさえあった。経済的条件、それに交通の要衝という地理的条件が重なって、「町」として存続したものが多い。

〈三河型〉は、在地土豪が坊主となり、その周囲に寺内町が形成されるというタイプである。これには地形的にみると、上宮寺を除いていずれも台地に位置し、防衛線としていたという共通点がみられる。〈畿内型〉のように、環濠などの明確な囲郭や、屋敷割の段階では都市的な短冊型地割が見出せなかった。

〈北陸型〉は、真宗寺院の頻繁な移動が寺内町形成に影響を与えているタイプである。〈三河型〉同様、寺内町が河岸段丘などの台地上にある。この点は、平野部の寺内町が多くみられる〈畿内型〉とは対照的である。

寺内町研究は個別事例の深化とともに地域類型の抽出、それらの比較が不可欠であると考えるので、今後更に寺内町のフィールドワークを実施することでこれらの類型を完成させたい。

論文審査結果の要旨

学位請求論文「寺内町の歴史地理学的研究」は寺内町を歴史地理学的手法を用いて、具体的かつ実証

的に検討したものである。寺内町とは、蓮如＝一向一揆と関連づけられる、中世にはじまる環濠城塞都市で、第二次世界大戦後、寺内町の研究は非常に活発で、歴史地理学の他に文献史学、建築史学、考古学を始めとする関連分野において多大の研究業績の蓄積がみられる。寺内町研究に関して先鞭をつけたのは本研究と同様歴史地理学の研究者であった。歴史地理学は空間 (Raum. Space) という観点を特に重視する地理学の主要分野の1つである。その手法は、主として地図上の事実、あるいは地図に描かれ得る事実をベースにして過去の景観を復元する。本研究も、この観点到に立脚し、寺内町の作られ方やその内部構造、城下町との構造上の類似性等、多くの図面を作製することにより、あるいは地籍図や古地図類を読み解くことや考古学的な発掘成果を踏まえたものとなっている。

寺内町研究が歴史地理学の研究者によって開始されたのは、次のような事実に基づいている。すなわち、荒撫地あるいは氾濫原として見向きもされなかった悪条件の土地を、当時の先端技術を駆使した土木技術によって克服した、条里制集落などとともに典型的な歴史地理学研究の事例であるということから、土地を中心とする自然環境とそこに居住する人間との関係（地理学では地人相関説と称される）を主要なテーマとしてきた地理学にとって研究対象であると看做せるからであった。しかしながら、歴史地理学の研究者による寺内町研究は、歴史地理学の研究者の層が薄いこともあり、その後本格化しなかった。第2次世界大戦後になると、文献史学、建築史学、考古学などの諸分野の研究が目立つようになってきた。そのような学問的状况の中で、一貫して歴史地理学的手法を用いて寺内町研究を実施してきた唯一の研究者が申請者であり、歴史地理学の研究者による最初の研究書（255ページ）が提出された学位請求論文である。

本研究は以下の4点において独自性が認められる。第1点は、常に歴史地理学を中心に、他の関連諸分野の研究動向に対して、研究史上の整理を行なっている点である。研究者の義務として、先行業績に対して敬意を払いつつ、目配りを行なうことは当然のことであるといえる。しかし先行業績に対する目配りを実施することは、本研究のように研究対象が他の関連諸分野にまたがっている場合非常に困難なものといえよう。この点に関して本研究においては、要領よく研究史の整理を行なっている。

第2点は、本研究が中世にはじまる都市の一類型である寺内町に関する歴史地理学的手法を主に用いた研究である。それ故、中世以降が研究の主対象時代となるのであるが、地理学研究者の眼は現在に関心をもつため常に「現在」に置かれているのである。つまり中世にはじまる都市の一類型である寺内町研究の意義の1つは、現代都市をより深く理解するという点である。現代都市成立のルーツは種々考えられるが、寺内町は「プラン」、「形態」および「景観」など外形面に特色をもつ。本研究の特色の1つは、絶えず現代都市を念頭に置き、その関連において寺内町にみられる「プラン」、「形態」「景観」などの研究を行なっている点である。すなわち、現代都市のルーツとしての寺内町を分析・検討しているのであるが、この点が他の寺内町研究ではあまりみられない独自性の観点であるといえ、今後の寺内町保存の基礎的資料となっている。

第3点としては、第3章以下の寺内町各論において、各寺内町の景観や「プラン」などの構成要素が解明されているが、その中でも本研究では寺内町に先行する原集落の存在を強調する。先行する原集落に関しては、今井町の事例については先行業績の存在が指摘されている。先行する原集落の比較・検討は寺内町を分析する場合、寺内は町であるか村であるかという大問題と深く関連してくる。本研究では先行する原集落を分析することで、中世にはじまる都市のあり方自体の概念を再考する必要があること

を示した。

第4点としては、各地の典型的な寺内町を検証することにより、「都市化の萌芽」と「一揆の拠点」という2つの属性によって、「畿内型」、「三河型」および「北陸型」という3類型化を試みている。地理学的手法の1つに研究対象の分布図を作成し、その類型化を行なうという基本的作業が存在する。本研究でもかかる地理学的手法にそって類型化が試みられている。このような類型化は従来みられなかったものであり、今後更に3地域以外のフィールドワークを重ねることで類型化を完成させる方向を示した。

次に、本研究の審査・判定に対する審査委員会の基本的立場を述べておく。

一般に学術研究は、所属している学界ベースの課題意識に基づいて、可能かつ適切な資料を発見・吟味し、これに応じた分析手法を採用して研究する。そのことによって結果として共有する価値のある情報を獲得したか、さらには新しい知見をもたらすなど学界や社会に対して貢献があるかないかに関して評価されるものである。審査者は、本学位請求論文が、博士論文として適切であるかどうか、これらの点について慎重に審査した。

学位請求者は本学の規定による2度の審査において、各審査員から提起される疑問点に関して迅速に対応し、3回目の審査では多数の参加者の前で質疑やコメントに的確に対応した。これらの審査を通じて、たび重なるフィールドワークの成果をとり入れた本研究は、上記の基本的な立場として示された諸点をクリアする、充実した内容であると、結論した。

審査者一同の意見としては、本論文が学術上極めて高く評価されるものである事を認めるものであるが、以下の点について研究が進められ記述が充実されたならば、本論文の価値がさらに高くなるものと確信している。

即ち、第1に、完成度の高い先行業績などの史料整理に対して、第二次世界大戦以前の研究史に関して、他の関連諸分野の研究業績を加えること、第2に、特に近年進展が著しい考古学の発掘資料を積極的に利用し、論を展開すること、第3点としては、結章部分に関して説明を補うこと、である。

とはいえ、今後より多くの事例を調査する事で、よりすぐれた研究となる事が確信されるので、審査者一同は、この提出された論文を、博士(学術)の学位に値するものであると一致して判定した。